

# 楽しむ無学者——後期クザーヌスにおける 思想的革新の一局面

八 卷 和 彦

## 1. 「楽しむ無学者」の典型的な場面

クザーヌスの『無学者・精神について』*Idiota de mente* を読み始めるとすぐに、次のような興味深い情景に出会う。少し長くなるが引用して紹介する。

「驚くべき敬虔さをもってたくさんの人びとが〔西暦1450年の〕記念祭のためにローマへと急いでやってきていた時に、同時代人のなかでもっとも優れた一人の哲学者が、橋を渡って行くその人びとの姿に驚いているのが見かけられたようだ。その哲学者をある好奇心の強い弁論家が懸命に探していた。彼は、色白の顔、くるぶしまで達するトガ、およびその他、物思いにふける人間の威厳を表示するものごとを身につけていた。哲学者を見出すと彼は親しげに挨拶をして尋ねた。何が彼〔哲学者〕をそこに立ち止まらせているのですかと。〔哲学者が答える〕驚きです。…〔哲学者〕「世界のほとんどすべての地域から無数の民衆が集まってきているのを目の当たりにして、かくも多様な肉体の中に一つの信仰が存在していることに、私はとりわけ驚かされているのです。…〔弁論家〕「このようなことに、哲学者たちが理性によって到達するよりも明瞭に、無学者たちが信仰によって到達しているということは、確かに神の賜物に違いありません」。…〔哲学者〕「友よ、私は世界中を旅しながら知者たちのもとに

行き、精神の不滅性についていっそう確信できるように努めてきた。…しかしこれまでのところ私は、自分の探求していることに、この無知な民衆が信仰によって獲得しているほどに完全で明晰な理解をもっては到達できていないのです。…〔弁論家〕「〔それでは、〕私の見るところでは驚くべき人物である無学者に、あなたの望んでいることを聞いてみるのがよいでしょう」。〔哲学者〕「できるだけ早くそれが実現するようお願いしたい」。〔弁論家〕「では私に付いて来て下さい」。そして二人は永遠の神殿近くの小さな地下室へと降りて行って、木材からサジを作っている無学者に弁論家が話しかけた。「無学者よ、君がこのようにつまらない仕事に従事しているのをこの大哲学者によって見られるのは、恥づかしい。彼は、このような君から何らかの洞察を聞くことになるとは、よもや思わないだろう」。〔無学者〕「私はこれらの修練に喜んで従事しているのです。なぜなら、これはたえず精神と肉体を養ってくれるからです。それゆえ、あなたのお連れになったこの人が哲学者であるのならば、私を軽蔑することはないと思います。私はこのサジ作りの術に勤しんでいるのですから」。〔哲学者〕「その通りだ。プラトンでさえ、時折、絵を描いていたと本に記されているが、もしそのことが思索と対立するものであったならば、彼が実際にそうしたとは到底信じられないであろう」。…〔無学者〕「確かにその通りです。私はこの術において自分の欲していることを象徴的に探求しては精神を養い、サジを売っては身体を生氣づけているのです。こうして私は、自分にとって必要なものすべてに十分に到達しているのです」。〔哲学者が慎重に応答する〕「私は、知恵で名声のある人のもとに行く際には、まずは自分が悩まされていることを入念に考えておいた上で、〔それに関する〕文書を提示し、その文書の意味を尋ねるとというのが、私の習慣です。しかしあなたは無学者ですから、どのようにあなたを促して、精神というものについてあなたが持っている見解を教えてくださいましたらよいのか、私には分かりません」。〔無学者〕「自分の考えていることを言わせるのに私ほどに容易な人は、他に居ないと思います。なぜなら

ば、私は自分が無知だと自認していますから、答えるのを恐れることはありません。ところが学のある哲学者や学識で評判の高い人々は、失敗するのを恐れて深刻に考えこむものです。だから、あなたが私に望んでいることをはっきりと言ってくだされさえすれば、ありのままの答えを受け取れます」<sup>(1)</sup>。

以上の長い引用に描かれている情景には、いくつかの意味深い対照が筆者クザヌスによって設定されている。学者と無学者、理性の力と信仰の力、弁論家の裕福さとサジ作り職人の貧しさ、学者の用心深い閉鎖性と無学者の自信に満ちた開放性、自分の仕事に悩む学者に対して自分の仕事という修練において自立して楽しむ無学者ならびに自発的に巡礼に参加して楽しむ民衆たち。

---

(1) *Idiota de mente*, h V, I, n. 51, 5- n. 55, 13: Multis ob iubiliaeum Romam mira devotione accurrentibus auditum est philosophum omnium, qui nunc vitam agunt, praecipuum in ponte reperiri, transeuntes admirari. Quem orator quidam sciendi avidissimus sollicito quaerens ac ex faciei pallore, toga talari et ceteris cogitabundi viri gravitatem praesignantibus cognoscens blande salutans inquit, quae eum causa eo loci fixum teneat. Philosophus: Admiratio, inquit. [...] Nam cum ex universis paene climatibus magna cum pressura innumerabiles populos transire conspiciam, admiror omnium fidem unam in tanta corporum diversitate. [...] (Orator): Certe dei donum esse necesse est idiotas clarius fide attingere quam philosophos ratione. [...] Philosophus: Ego [...] omni tempore mundum peragrans sapientes adii, ut de mentis immortalitate certior fierem, [...] sed hactenus nondum quaesitum adeo perfecte ac lucida ratione attingi quemadmodum hic ignorans populus fide. [...] (Orator): hominem idiotam meo iudicio admirandum, de qua re volueris, audies. (Philosophus): Oro quantocius hoc fieri. Orator: Sequere. Et cum prope templum Aeternitatis in subterraneum quendam locellum descenderent, idiotam ex ligno coclear exprimentem alloquitur orator: Erubeo, idiota, inquit, te per hunc maximum philosophum his rusticis operibus implicatum reperiri; non putabit a te se theorias aliquas auditurum. Idiota: Ego in his exercitiis libenter verosor, quae et mentem et corpus indesinenter pascunt. Credo, si hic, quem adducis, philosophus est, non me spernet, quia arti cocleariae operam do. Philosophus: Optime ais. Nam et Plato intercise pinxisse legitur, quod nequaquam fecisse creitur, nisi quia speculatione non adversabatur. [...] Idiota: Immo in hac mea arte id, quod volo, symbolice inquiri et mentem depasco, commuto coclearia et corpus reficio; ita quidem omnia mihi necessaria, quantum sufficit, attingo. Philosophus: Est mea consuetudo, cum hominem fama sapientem accedo, de his, quae me angunt, in primis sollicitum esse et scripturas in medium conferre et inquirere earundem intellectum. Sed cum tu sis idiota, ignoro, quomodo te ad dicendum excitem, ut, quam habeas de mente intelligentiam, experiar. Idiota: Arbitor neminem facilius me cogi posse, ut dicat quae sentit. Nam cum me ignorantem fatear idiotam, nihil respondere pertimesco. Litterati philosophi ac famam scientiae habentes merito cadere formidantes gravius deliberant. Tu igitur, quid a me velis, plane si dixeris, nude recipies.

これらの対照設定の目的が、真理探求における制度化に対する批判にあることは明白であろう。

## 2. クザーヌスの絶頂にして転換点としての1448年から1450年

とは言え、上で紹介した情景の意味を十分に理解するためには、まずはクザーヌスが無学者 *Idiota* という理想像を彫琢した時期の彼自身の具体的生活を確認しておく必要がある。

モイテンの研究が示しているように<sup>(2)</sup>、1448年から1450年という二年の間にクザーヌスはローマ教会内で大いに栄進を遂げた。1448年12月20日に、新しく教皇になったばかりのニコラウス5世によって枢機脚に挙げられ、1450年1月11日には、教皇から赤い帽子をかぶらされて正式に枢機脚となった。ほとんど同時期の1450年3月23日には、教皇によってブリクセンの司教に任命されて、4月26日には司教叙階式が執り行われた<sup>(3)</sup>。さらに言及しておくべきことは、1447年のコンクラーヴェ（教皇選挙会議）において、一時的にはあるが彼の名前が投票されたこともあったという事実である。「一市民の息子が教会のなかでこれ以上の名声を得ることはありえないだろう」<sup>(4)</sup>とモイテンが記している通りであろう。

このような栄進を根拠としてクザーヌスは、故郷であるコースに滞在した時に、1449年10月21日という日付をもつ「小伝記」を記させたのである。この中には次のような一説がある。「聖ローマ教会が〔人の〕出生の場所や階層を顧慮することはなく、〔その人物の〕功績に物惜しみすることなく報いるということは、誰もが知っている」<sup>(5)</sup>。この一節は、クザーヌス自身が自分の出自に

(2) Meuthen, *Nikolaus von Kues 1401-1464*, 77; 82 (酒井訳97頁; 105頁). *Acta Cusana*, Nr. 776-779.

(3) Meuthen, ebd., 98 (酒井訳119頁); *Acta Cusana*, Nr. 872.

(4) Meuthen, ebd., 77 (酒井訳97頁).

(5) *Acta Cusana*, Nr. 849, 13f: ut sciant cuncti sanctam Romanam ecclesiam non respicere ad locum vel genus nativitatis, sed esse largissimam remuneratricem virtutum.

ついて意識的であるとともに枢機卿に挙げられたことを誇りに思っていることをも示している。

しかしながら彼は、この満足感とともに自身が市民階級の出身であることを忘れ去るということはしなかった。むしろまったく逆であって、出身地クースを軽視することもなかった。それは、上の「小伝記」を記させた直後に、この町に自分の財産を用いて聖ニコラウス・ホスピタルを設立することを計画したという事実に明白に示されている。このホスピタルは、老人ホームとしての機能と共に、彼自身が収集したたくさんの貴重な写本を保存するという機能も兼ねることとなっていた<sup>(6)</sup>。そして600年後の現在も、このホスピタルは両方の機能を維持して存続しているのである。

前節で紹介した、ローマのテヴェレ河の橋の上で驚いている哲学者の姿は、おそらく同じ年に同じ場所で同様の光景を目撃したクザーヌス自身の姿と重ね合わせることができるであろう。その際に彼は枢機卿の一人として、自身の属する民族に対する教皇使節であるという、自分の教会における制度上の立場を意識しつつ、眼の前にいる無数の無学者の群れの中に自分と同郷の人たちならびに自らの司教区の信徒たちも交じっていることも想像したに違いない。なぜならば、その約10年後に彼は、教皇ピウス二世の委託に基づいてまとめた『全面的改革』という教皇庁についての改革提案書において、枢機卿団は、ローマ教会ならびに教皇庁内部における査察から始めて、その後各自の管轄地域に査察官として派遣されるべきである、としたのだからである<sup>(7)</sup>。

実際に彼は、1450年12月24日に教皇から、教会改革ならびに修道院改革に携わると共に聖年の記念贖宥を授けるという任務を帯びた教皇使節に任命され、この年の最後の日にローマから、約1年4か月にわたって西ヨーロッパ各地を

---

(6) Meuthen, *Nikolaus von Kues 1401-1464*, 137 (酒井訳168頁以下)。

(7) 以下を参照されたい: *Reformatio generalis* h XV/2 n. 6, 33f.: in hoc a nostra ecclesia Romana et curia incipiemus et consequenter visitatores ad singulas provincias mitemus.

廻る長い旅へと、出発したのであった。

また1449年には哲学に関して重要な経験をクザーヌスがしていたということも見逃すことはできない。すなわち、ハイデルベルク大学の教授であるヨハネス・ヴェンク Johannes Wenck に対する著作の上での応酬である。この経緯を次のようなことである。後者は、クザーヌスの『覚知的無知について』 *De docta ignorantia*（「1440年2月にクースにて摺筆」とクザーヌスによって記されている著作）を読んで、それを論駁する『無知の書物について』 *De ignota litteratura* を1442年3月から1443年の盛夏までの間に書いていた<sup>(8)</sup>。これに対して、枢機卿に挙げられたクザーヌスは、1449年10月9日に摺筆した『覚知的無知の弁護』 *Apologia doctae ignorantiae*<sup>(9)</sup> を以って反論したのである。

クザーヌスとヴェンクの間での主要な論争点は、真の神学にとってクザーヌスの *coincidentia oppositorum*（反対対立の合致）という思考を容認することが必要不可欠であるかどうか、ということであった。当時の大学神学部の教授であったヴェンクはアリストテレス派の一人として、とうていこれを容認できないので、論駁を試みたのである。それゆえにクザーヌスはこの反駁書において、「もしも彼ら〔アリストテレス学派〕がアリストテレスから離れていっそうの高みに到達するのであれば、それはほとんど奇跡のようなものである」<sup>(10)</sup>と主張する。ヴェンクに対する彼の批判は時に人格に関するものにさえなっており、以下のようにも述べられる。「聖書という耕地をもっている現代のきわめて多くの教授たちは、そこには神の王国の宝物が隠されていると聞いているはずなのに、彼らは〔それを〕もっているということだけで、自分のことを長者であるとみなしている。この『無知の書物について』の著者もこういう類の人物である。しかし、この宝庫がいかなる知者の眼からも隠されたままであることを悟

(8) Haubst: *Studien zu Nikolaus von Kues und Johannes Wenck*, 99.

(9) ebd., 100.

(10) 以下を参照されたい: *Apologia*, h II, n. 7, p.6, 11sq.: ut sit miraculo simile [...] reiecto Aristotele eos altius transilire.

る人は、自分が貧しいものであると知ることを心から喜ぶのである。そして彼は、他の人々がそれを知らないのに対して、自分は自らが貧しいものであることを知っている点において、先に言及した人々よりもよりも豊かであることを悟り、そして、まさにこの貧しさを知っていることによって、彼はへりくだるのである。ところが、この無知な人物〔ヴェンク〕のように、自分のことを長者であると思いなすことで、言葉だけの虚しい学問に思い上がった上に、その序文において、自分が永遠なる知恵を解明すると約束することに、ためらいを覚えることのない人もいるのだ<sup>(11)</sup>。

改めて記すのであるが、以上の文章は『覚知的無知の弁護』からの引用であり、この著作は1449年10月9日に擲筆された。そして、本節の冒頭に引用紹介した『小伝記』は同じ年の10月21日の日付をもっている。さらに、第一節で引用考察した『無学者・精神について』は翌1450年夏に著されたものである。これらの、一年足らずの期間に著された三者の間には、クザーヌスの思索における着眼点において共通性が見いだされることはもとより、とりわけヴェンクへの批判の文章と『無学者・精神について』の文章との間には内容的な共通性が存在することは明らかであろう。しかし同時に、この両者の間には、説明の方法という点において大きな相違も存在するのである。だが、これは後に改めて考察する。

---

(11) *Apologia*, n. 5, p.4, 10-12; 14-19 : Tactant se [...] huius temporis plerique magistri, qui agrum habent Scripturarum, ubi audiverunt occultari thesaurum regni Dei, ex hoc se divites, ut is homo, qui Ignotam scripsit litteraturam. Sed qui vidit thesaurum manere absconditum ab oculis omnium sapientum, in hoc gloriatur, quia scit se pauperem; et in hoc se videt praefatis ditioem, quia scit se pauperem, quod alii ignorant. Unde ob scientiam paupertatis hic se humiliat, et ob praesumptionem divitiarum alius superbit, uti hic homo ignorans inflatus vanitate verbalis scientiae in suo exordio non veretur se promittere elucidationem aeternae sapientiae. なお、このヴェンクとクザーヌスとの応酬の詳細については、八巻和彦2001の25-40頁を参照されたい。

### 3. 職人としての無学者

クザーヌスの後期における主要な思想的関心事は、いかにしたら神の世界への内在を分かりやすく説明できるか、という点であったことは、彼の著作の数々が示しているとおりでである。というのは、神の世界への内在ということそのものは、以下のような彼の最後の著作の一節が明示しているように、彼自身にとってはこの1450年前後にはすでに確信できることとなっていたからである。「真理は明瞭であればあるほど、それだけ容易に把握できるのである。かつて私は、真理は闇のなかにこそ見いだされるものだと考えていた。…それ〔真理〕は路上で呼びかけているのだ、君が『無学者』の中で読んだことがあるように。疑いもなくそれ〔真理〕は、いたる所で自身を容易に見いだされるものとして示しているのだ。」<sup>(12)</sup>

この「かつて」*aliquando* が『覚知的無知について』*De docta ignorantia* 執筆時を中心とする前期であることは、『覚知的無知について』の第一巻末尾の「厳密な真理は、われわれの無知の闇のなかに把握されえない仕方では輝いている、とわれわれは結論する」<sup>(13)</sup>という一文から明らかである。そして、1450年夏にまとめられた一連の『無学者』篇の最初の著作である『無学者・知恵について』第一巻の冒頭近くで、確かにクザーヌスは、彼にとっての理想的人物としての無学者にこう言わせている。「巷には知恵の叫び声が響いています。その叫びは、知恵そのものは至高のところに住まわっているのだという叫びなのです」<sup>(14)</sup>

(12) *De ap. theor.* h XII, n. 5, 9-13: Veritas quanto clarior tanto facilius. Putabam ego aliquando ipsam in obscuro melius reperiri. [...] Clamitat enim in plateis, sicut in libello De idiota legisti. Valde certe se undique facilem repertum ostendit (佐藤直子訳651頁)。

(13) *De doct. ign.* h I, I, 26, (n. 89), (h I, p. 56, 13-15): concludimus praecisionem veritatis in tenebris nostrae ignorantiae incomprehensibiliter lucere (岩崎・大出訳75頁)。

(14) *De sap.* h V, I, n. 3, 11-12: sapientia foris clamat in plateis, et est clamor eius, quoniam ipsa habitat in altissimis (小山宙丸訳542頁)。



ところで『無学者』篇における無学者の人物像は、すでに見たとおり以下のように特徴つけられている：貧しく、教育を受けておらず<sup>(15)</sup>、しかし、自分が無知なものであることを自認している。それゆえに彼は謙虚であり<sup>(16)</sup>、永遠の神殿近くの地下室に隠棲している<sup>(17)</sup>。さらに、『無学者』篇の第三の著作である『無学者・精神について』における無学者の人物像は、第一節でみたようにいっそう具体的に描かれていて、木サジ作りの職人であり、この技術arsによって自分が探求したいことを象徴的な仕方を探求することで精神を養い、自分の術でこしらえたサジを売って肉体を養っているというのである。

このような具体的な人物像の彫琢という点で、クザーヌスにおける無学者像はタウラーやジェルソンが言及している無学者とはまったく異なっている——シュタイガーは、これらの無学者がクザーヌスの無学者像のモデルになっているとしているが<sup>(18)</sup>。クザーヌスの無学者は、単に当時の教会および神学の体制に対する批判として対置されるという役割を演じているのみならず、さらにクザーヌスの最大の関心事であった神の世界への内在という事実を身を以て示すという、重要な役割をも果たしているのである。その際の思考の中心軸となっているものは、神の無限なる術と、その似像としての人間の有限な術との間の相互関係である。この関係は、神がその言葉、術あるいは計画に基づいて万物を想像したという根本的前提<sup>(19)</sup>に基礎をおいていることは言うまでもない。

このような関連性において無学者は哲学者に対して次のように言明する。「人間のすべての術は無限にして神の術の一定の似像であると、私はためらう

(15) Ibid. I, n. 1, 3 (小山宙丸訳541頁)。

(16) Ibid. I, n. 4, 4 (小山宙丸訳543頁)。

(17) Ibid. II, n. 28, 5 (小山宙丸訳559頁)。

(18) Steiger: XXI; XXVI。

(19) 以下を参照されたい： *Epistula ad Nicolaum*, n. 18, S. 32, Z. 28-30: deus invisibilis per verbum, artem seu conceptum suum, sibi soli notum, omnia quae in natura subsistunt creavit. (八巻和彦訳「ニコラウスへの書簡」182頁)。

ことなく断言します」<sup>(20)</sup>。さらにこの木サジ職人は、自分の携わっている術に対して、絵画や彫刻のような術よりも高い価値を付与するのである。その根拠は以下のとおりである。画家や彫刻家は現に存在する物という原型や何らかの自然物の形を模倣するのに対して、彼自身は、木サジを作るに際して、人間の精神によって創造されたアイデアを原型としながら木材からサジを制作する、という違いがあるからである。このような考察に基づいてこの無学者は、さらに次のように主張する。「私の術は、創造された形態の模倣というよりもむしろ完成なのであって、それゆえに永遠の術〔神の術〕にいつそう似ているのです」<sup>(21)</sup>。確かに木サジ作りという無学者の術は、何らかの自然物という対象を模倣する活動的なのではなく、むしろ神の創造活動を模倣する“創造的”活動であると言えよう。

無学者のこのような主張に従って、人間の精神による発見的な術としての *ars humana* は、クザーヌスの思索においては自然物を模倣する術 *ars imitatoria* よりも上位に位置づけられている。前者に属するものとしては、クザーヌス自身によって後年に考案された球遊びなどの遊びが挙げられる。そればかりか、このような思考に基づいてクザーヌスは機械学芸 *artes mechanicae* に対して、当時の伝統とは異なって新たに積極的な意義を付与することができたのである。というのは、1300年から1600年にかけて人文主義分野の教授たちは、自由学芸を機械学芸から区別しつつ、手仕事や実験、それに人体解剖などを軽蔑する傾向があったからである<sup>(22)</sup>。このような文化的コンテクストに改めてクザーヌスの無学者像をおいて見るならば、その革新的な意味がいつそうよく理

<sup>(20)</sup> *De mente*, II, n. 59, 12-14: me absque haesitatione asserere omnes humanas artes imagines quasdam esse infinitae et divinae artis; Ibid, n. 61, 10- 12: Omnis [...] ars finita ab arte infinita. Sicque necesse erit infinitam artem omnium artium exemplar esse, principium, medium, finem, metrum, mensuram, veritatem, praecisionem et perfectionem..

<sup>(21)</sup> Ibid, II, n. 62, 13f: ars mea est magis perfectoria quam imitatoria figurarum creaturarum et in hoc infinitae arti similior.

<sup>(22)</sup> Zilsel, 49; 56.

解できるであろう。この無学者は単に職人であるばかりではなく、『無学者』篇の最後の著作である『無学者・秤の実験について』においては、さまざまな具体的な実験をさえも自から提案しているのである。

さらに注目すべきことには、この時点以降のクザーヌスの諸著作においては、神の世界への内在を説明するために、画家<sup>(23)</sup>、地図作成者<sup>(24)</sup>、貨幣鍛造者<sup>(25)</sup>、そして金庫制作の親方<sup>(26)</sup>などの職人やその技芸が活用されているのである。このようにクザーヌスは機械学芸も含む諸技芸を高く評価するのであるが、そのことの理論的根拠は以下のような思考にある。すなわち、神の世界への内在という視点から自由学芸と機械学芸とを考察するならば、そのいずれにも神の創造活動が映現しているのであるから、自由学芸を機械学芸の上に置くという伝統的な区別の仕方が無意味となるのである<sup>(27)</sup>。

『無学者・知恵について』の第二巻の末尾近くに、すなわち本稿の冒頭に引用したシーンのすぐ前に、次のような興味深い叙述がある。「神は賞賛されるべきです。なぜなら彼は、私というまったく無知蒙昧な人間を何か役に立つ道具のように使ってくださいましたのです。それは、あなた〔弁論家〕の精神の目を開かせて神ご自身をあなたに驚くべき容易さで観させるためだったのですが、それも、〔予め〕ご自身をあなたに観えるようにしておいてくださったのですから」<sup>(28)</sup>。本稿における神の術と人間の術との関係についてのこれまでの考察を前提にしながらこの文章を読むと、次のようなことが明らかになるだろう。

(23) *De mente*, II, n. 62; *De vis.* n. 2 (八巻和彦訳13頁以下); *Epistula ad Nicolaum*, n. 8 (八巻和彦訳187頁); *Sermo CXXXV*, n.4 etc.; *Sermo CCLI*, n.7- n.9, etc.

(24) *Compendium*, h XI 3, VIII, n.22- n. 24 (大出・野澤訳40-43頁)。

(25) *De ludo*, h IX, II, n. 115.

(26) *De vis.* h VI, XX, n. 89 (八巻和彦訳121頁)。

(27) 両学芸の間の伝統的な位置づけについては、Zilsel 書に詳しい (Zilsel, S. 59f.)。しかし、興味深いことにはツィルゼルの研究の中にはクザーヌスへの言及は見いだせない。ツィルゼルの見解では、自由学芸と機械学芸の実質的な結合は、1600年頃にギルバート William Gilbert (1544-1603)、ガリレイ Galilei (1564-1642)、そしてベーコン Francis Bacon (1561-1626) によって成立したのであり、ここから近代自然科学が生まれたという。

一方においてこの木サジ作りの職人は、弁論家を神を観ることへと神が導くための道具と自からがなりつつ、他方において彼は、木サジ作りの職人であるという点で神の創造の術の似像の体現者として弁論家の前に立っているということでもある。無学者のこのような実践には、神の内在が二重の意味で、すなわち、無学者のなかに、また無学者を通して、顕現していると言えるだろう。そして無学者自身がこの二重の神の内在を自覚的に経験しそれを実現しようと努力しているからこそ、『無学者・精神について』の末尾において貧しい一介の無学者が学識が深く裕福な弁論家によって「最善の無学者よ、私はあなたに感謝する」<sup>(29)</sup>と語り掛けられるのであろう。

#### 4. 大きな喜びを伴う知恵の狩猟

すでに引用したように、クザーヌスは1450年にまとめた著作『無学者・知恵について』において無学者をして、「巷には知恵の叫び声が響いています。その叫びは、知恵そのものは至高のところに住まわっているのだという叫びなのです」<sup>(30)</sup>と弁論家に対して語り掛けさせていた。ほとんど同時にまとめられた『無学者・精神について』においてクザーヌスは、無学者をして弁論家に対して、すでに引用紹介したように、こう反論させている。「私はこれらの修練に喜んで従事しているのです。なぜならこれはたえず精神と肉体を養ってくれるのだからです。それゆえ、あなたのお連れになったこの人が哲学者であるのならば、私を軽蔑することはないと思います。私はこのサジ作りの術に勤しんでいるのですから」<sup>(31)</sup>。この発言から分かるように、この無学者にとって知恵と

(28) *De sap.* II, n. 46, 1-5: Benedictus deus, qui me imperitissimo homine tamquam qualicumque instrumento usus est, ut tibi oculos mentis aperiret ad intuendum ipsum mira facilitate modo, quo ipse se tibi visibilem praestitit (小山宙丸訳571頁)。

(29) *De mente*, XV, n. 160, 8: gratias tibi agens, optime idiota.

(30) 上注(14)を参照されたい。

(31) 注(1)の引用箇所の後半を参照されたい。

真理の探求は大きな喜びであった。さらにこの喜びについてクザヌスは、『無学者』篇においてのみならず、彼の最後の著作である『観想の頂点について』においても、以下のように語っているのである。「この祝日のあいだ、私はこの観想にきわめて大きな喜びをもって従事していたのです」<sup>32)</sup>。このような、クザヌスによって繰り返し言及される真理探求における〈喜び〉を、単なるトポスとみなすべきではないだろう。むしろそれは、自身の経験によって獲得された確信を表現するものであるに違いない。なぜならばクザヌスにおいてこの探求は、喜びという宝物<sup>33)</sup>に到達する<sup>34)</sup>ために精神が楽しい憧憬において運動することだとされているのだからである。

このような思考の枠組みのなかで、1462年に著された対話篇『球遊び』に呈示されている〈球遊び〉もクザヌスによって考案されたに違いない。というのは、この書物は以下のような対話から始められているのである。「〔ヨハンネス〕私たちは皆、この新しく楽しい遊びに驚いています。それはおそらくこの中に高邁な思想の反映が表現されているからなのでしょう。…〔枢機卿即ちクザヌスが応答して言う〕この、球を用いてのとても楽しい修練 *exercitium* は少なからぬ意義をもつ哲学を私たちに示してくれるはずだと、私は思っています」<sup>35)</sup>。われわれはここで、修練 *exercitium* という語が、『無学者・精神について』における無学者の発言でも、またこの『球遊び』でも用いられているという共通性に注目すべきであろう。前者においては木サジ作りについて言われており、後者では球遊びについて言われているのであるが、ここには、体と精神を用いつつ実践する喜びに満ちた真理探求のための修練という共通の理解

32) *De ap. theor.* n. 4, 12f.: circa hanc theoriam in his festivitibus versatus sum cum ingenti delectatione (佐藤直子訳650頁)。

33) 以下を参照されたい: *De sap.*, I, n. 1, 10 (小山宙丸訳541頁)。

34) 以下を参照されたい: *Ibid.*, I, n. 18, 9-12 (小山宙丸訳553頁)。

35) *De ludo*, I, n. 1, 8f.; n. 2, 4-6: Admiramur omnes hunc novum iucundumque ludum, forte quia in ipso est alicuius altae speculationis figuratio, quam rogamus explanari. [...] Hoc enim tam iucundum globi exercitium nobis non parvam puto repraesentare philosophiam.

が存在しているはずである。

さらに、「知恵の狩猟」というクザーヌスのコンセプトもまた同じ思想的コンテキストに属しているだろう。「狩猟」という語をもって哲学を隠喩的に表現することは、プラトン以来の伝統として存在していたのであり<sup>(36)</sup>、クザーヌスもそれに従っている。しかし、後期のクザーヌスは、狩猟における楽しさという要素を新たに導入し、それを強調しているのである<sup>(37)</sup>。1455年8月1日に自分の司教座であるブリクセンでした説教 CXCIX においてクザーヌスは、真理探求を楽しい狩猟にたとえながら、キリストが哲学の狩人に真理を獲得するための狩猟の正しい方法を教えれば、その狩人は大きな喜びを味わうことができるのだ、と説いた<sup>(38)</sup>。

1458年の著作である『知恵の狩猟』*De venatione Sapientiae* において彼は、実際に哲学的狩猟に伴う、またそれから生み出される喜びをくりかえし強調している。例えば、第四の狩場である光において、理性はこの大いに楽しい狩猟において喜びを得ると<sup>(39)</sup>。さらに著者クザーヌスは、この哲学的狩猟を「大きな狩猟」<sup>(40)</sup>と呼ぶとともに「この普遍的狩猟」<sup>(41)</sup>とも呼んでいるので、この哲学的狩猟をたくさんの獲物が期待できる大がかりな巻狩りとみなしていることが想定される。この種類の狩猟は当時、特権階級あるいは貴族のスポーツのようなものであったのである<sup>(42)</sup>。

<sup>(36)</sup> 例えば：プラトン『ファイドン』66a3（松永訳184頁）；『ゴルギアス』500d9-10（加来訳167頁）；『リュシス』15, 218c4（生島訳210頁）。

<sup>(37)</sup> クザーヌスは「狩猟」という概念を初期の以下の著作でも用いている。しかし、そこにはまだ狩猟に伴う喜びの意味は含まれていない：*De coni.* (h III, II, 10, n. 126, 1), *De fil.* (h IV, VI, n. 86, 12)（坂本堯訳151頁、しかしこの日本語訳では *venatio* を「探求」と訳している）、*De genesi* (h IV, IV, n. 174, 3)（酒井紀幸訳524頁）。

<sup>(38)</sup> *Sermo CXCIX*, h XVIII 5, n. 9, 3-24.

<sup>(39)</sup> *De ven. Sap.*, XVI, n. 46, 3: *Gaudet intellectus in hac venatione laetissima*（酒井・岩田訳179頁）；*ibid.* XV, n. 42, 5: *in illa fit laeta valde iocundaque venatio*（酒井・岩田訳176頁）。

<sup>(40)</sup> *Ibid.*, XXXIV, n. 101, 4: *Magnam utique venationem feci*（酒井・岩田訳231頁）。

<sup>(41)</sup> *Ibid.*, XXXIX, n. 118, 1: *in arte huius generalis venationis sapientiae*（酒井・岩田訳247頁）。

<sup>(42)</sup> *Das Jagdbuch des Mittelalters, Ms. Fr. 616 der Bibliothèque nationale in Paris.*

ところが同時に注意すべきことには、当時、狩猟は知的な営みとはみなされおらず、自由学芸とは区別される機械学芸に分類されていたのである<sup>(43)</sup>。そしてクザーヌス自身も、これをこの意味での術 *ars* と表現している<sup>(44)</sup>。しかし、すでに見たように、1450年以降、当時の大学における風潮とは異なり、自由学芸と機械学芸の双方に神の創造活動の映現としての積極的な意義を見出していたクザーヌスにとっては、狩猟という機械学芸に属する営みに哲学という自由学芸に属する営みを象徴的に表現させることにためらいや困難は感じられなかっただろう。そして、よるこんで木サジ作りに勤しんでいる職人としての無学者をすでに知っているわれわれにとっては、これらの書物の間をつなぐ太い思想的きづなが存在していることを見出すのは容易である。すなわち、術 *ars* は喜びを得るために楽しみつつ実践されるべきであるというものである。*Wahrig Deutsches Wörterbuch* 『ヴァーリッヒ・ドイツ語辞典』の 'Spiel' (遊び) の定義は「楽しむためにそれ自体を目的として従事すること」, *Beschäftigung aus Freude an ihr selbst* とされている<sup>(45)</sup>。この定義は、クザーヌスの意味での様々な学芸・術に妥当する。そして、学芸と喜びと遊びの三者の間にこのような関係が想定されるのであれば、クザーヌスの時代に少なくとも一人の *idiotia ludens* 「楽しむ無学者」が生きていたと言えるであろう。それは誰か。この点については、後に考察しよう。

(43) 以下を参照されたい：Vgl. *dtv Lexikon des Mittelalters*, Bd. I, 1063f. 'Artes Mechanicae'. これに属する諸術は、狩猟以外は以下のとおりである：紡織術 *lanificium*, 武器製作術 *armatura*, 航海術 *navigatio*, 農法 *agricultura*, 医術 *medicina*, 演劇術 *theatrica*.

(44) 上の注(40)参照。

(45) 有名な書物『ホモ・ルーデンス』のなかで著者ホイジンガは、以下のように述べている：「我々はこの言葉を次のように定義づけようと考えた。遊びとは、自発的な行為もしくは業務であって、それは、ある一定の時間と場所の枠内で、自発的に受け入れた無条件に守るべき規則に従って遂行されるものであり、そのこと自体に目的をもち、緊張と歓喜の感情ならびに「普通の生」とは「違うものである」という意識の両方を伴っているものである」(*Homo Ludens*, 37; 里見訳56頁以下、ただし本訳文は里見訳のままではない)。

## 5. 楽しみとしてのメタ三段論法的な発見的哲学

すでに見たように、無学者は楽しみながら自分の手仕事に勤しんでいるのに対して、弁論家は「たえざる読書によってすっかり疲れ切って」<sup>(46)</sup>おり、また哲学者も、精神の不死性の問題を確信するために、賢者を尋ねて世界中を旅しながら艱難辛苦しているのである<sup>(47)</sup>。喜びの源としての真理を探求する学者たちが、その探究において喜びから遠く離れているばかりか、むしろ苦しんでいるという、この『無学者』篇に描かれている状況は<sup>(48)</sup>、言うまでもなく、伝統的な諸学問が、その本来的な目的からとらえられる限り、もはや無意味になっていることを明示している。

1449年にまとめられた著作『覚知的無知の弁護』においてクザーヌスは、論敵であるヴェンクもその一角を占めていたスコラ学に対して、以下の文章が示すような正面からの批判を行っていた。「学問は争いへと駆り立てられているものであるから、言葉の上での勝利を願望して増長するものであって、われわれの平安としての神へと向かって急ぐものからは遥かに離れているのである」<sup>(49)</sup>。

しかし1450年以降、クザーヌスは学問に対する批判の方法を変えた。なぜならば、もし彼が正面からの攻撃という批判のスタイルを維持するのであれば、それは当時の諸学問と同じレベルに自らが立っていることになるからである。それゆえに彼は、これ以降、諸学問に対する自分の批判は、ほのめかすか遊びのようにして実践することにしたというわけである——それは彼の後期の諸著

(46) *De sap.*, I, n. 1, 5f.: *Miror de fastu tuo, quod, cum continua lectione defatigeris innumerabiles libros lectitando, nondum ad humilitatem ductus sis* (小山宙丸訳541頁)。

(47) *De mente*, I, n. 52, 8-13. 注(1)の引用箇所を参照。

(48) *De sap.*, I, n. 12, 13-15 (小山宙丸訳550頁); *Ibid.*, n. 13, 5f. (小山宙丸訳550頁)。

(49) *Apologia*, n. 10, p. 7, 28- p. 8, 2: *scientia [...], quae est in exercitio ad confligendum, illa est, quae victoriam verborum exspectat et inflatur, et longe abest ab illa, quae ad Deum, qui est pax nostra, properat.*



作が示しているところであり、その一部分はすでにわれわれは本稿で見たとおりである。

哲学をする上でのこのような新たな方法は、知恵と真理をその本質にかなった仕方でも楽しみながら探求できるはずだという、クザーヌスによる積極的な提案とみなすべきであろう。しかしながら、この〈喜び〉は、神秘主義に特有の歓喜 *Wonne* とだけみなされるべきではない。むしろ、何らかの発見や発明の際に誰でもが感ずるであろう、まったく世俗的で無学者的な *laienhaft* 喜びもそれに属しているにとらえても差し支えないであろう。これは、『可能現実存在』*De possess* におけるコマ<sup>(50)</sup>や『球遊び』*De ludo globi* における球等の、クザーヌスが晩年の諸著作で用いている方法や比喩が明らかに示しているとおりである。

この新たな哲学の方法という関連でもう一つ、特徴的な具体例を示したい。それは、『非他なるものについて』*De non aliud* という最晩年とも言える1462年の著作の前半部分において、「他ならない」*non aliud* という概念を活用しながら展開されている対談である。少々長くなるが、以下に引用して紹介する。〔クザーヌスが対談相手のフェルディナンドゥスに尋ねる〕「われわれにまずもって知ることを成立させてくれるものは何であろうか。〔フェルディナンドゥスが答える〕定義です。…〔クザーヌスがさらに尋ねる〕では、あらゆるものを定義する一つの定義が定義されるものに他ならないことが、あなたには分かりますか。〔フェルディナンドゥスが答える〕私には分かります。なぜならばそれ〔一切を定義する定義〕は定義それ自身についての定義でもあるのですから。しかし、それがいかなるものであるのかについては、私は述べることができません。〔クザーヌスが応じる〕すでに極めて明瞭にこれを私はあなたに示しました。われわれが狩猟での走り回りの際に探していたものに気づかず

(50) *De poss.* h XI 2, nn. 18 (大出・八巻訳30-34頁).

に通り返してしまっ、それを無視してしまいがちであるという、まさにそのことが、これなのです。〔フェルディナンドゥスが尋ねる〕いつあなたはそれを示してくれたのでしょうか。〔クザーヌスが答える〕私が、あらゆるものを定義する一つの定義が定義されるものに他ならないと言った、まさにその時です<sup>(51)</sup>。このようなやり取りに導かれてフェルディナンドゥスは次のように述べることになる。「あなたの言われるとおりで。神は神に他ならないものであると私がとらえ、また、或るものは或るものに他ならないものであり、無は無、非存在は非存在に他ならないものであるととらえてみると、あなたの言われたことがはっきりと理解できます。…以上のことによって私は、〈他ならない〉があらゆるものを定義するのであるから、あらゆるものに先行するものであるということを、私は認識します。…〔クザーヌスが応じてまとめる〕これまで延べられたことからあなたは今や明瞭に以下のことを見えています。〈他ならない〉という語 *li non-aliud* について表示されるものはわれわれに単に原理への道筋として役立つのみならず、神の名づけえない名称をより適切に言い換えて表現するものなのです。その結果、彼〔神〕は、この名称〔他ならないもの〕のなかにいっそう正確な比喩におけるように、神を探求する者たちに対して輝き出るので<sup>(52)</sup>。こうしてフェルディナンドゥスは、直観的な仕方て神の内在についての洞察に導かれるというわけである。

同様な思考の導きは、クザーヌスのさらに晩年の著作でも応用されている。例えば彼の死の四ヵ月ほど前となる1464年の復活祭の後にまとめられた著作で

(51) *De non aliud*, I, n.3f. -II, n. 7 (Hrg. von Reinhardt, Machetta und Schwaetzer: *Nikolaus von Kue: De non aliud/ Nichts anderes* [Münster 2011] S. 46- 49): Nicolaus: Abs te igitur in primis quaero: quid est, quod nos apprime facit scire? Ferdinandus: Definitio. [...] Nicolaus: Vides igitur definitionem omnia definientem esse non aliud quam definitum? Ferdinandus: Video, cum sui ipsius sit definitio. Sed quaenam sit illa, non video. Nicolaus: Clarissime tibi ipsam expressi. Et hoc est id, quod dixi nos negligere in venationis cursu quaesitum praetereuntes. Ferdinandus: Quando expressisti? Nicolaus: Iam statim, quando dixi definitionem omnia definientem esse non aliud quam definitum (松山・塩路訳4-9頁)。

ある『観想の頂点について』の冒頭近くに次のような一場面がある。〔対談相手のペトルスがクザーヌスに問いかける〕「あなたは何を探求されているのですか」。〔それに対してクザーヌスが答える〕「あなたの言ったことは正しい」と。これに対してペトルスは、自分は「あなたが何を探求されているのですか」と尋ねたのに対して、「あなたの言ったことは正しい」などと答えて自分をからかわないでほしい、と異議を申し立てる。それに応じてクザーヌスは、「私は正しく答えたのだ。私は何 *quid* を探求しているのだから」と答える<sup>(53)</sup>。この著作では何性 *quidditas* としての可能自体 *posse ipsum* について思考が展開されるのであるから、クザーヌスの答えは正当であるのだが、対話相手のペトルスにとってはまったく唐突な返答であったに違いない。しかしこの唐突さによって、ペトルスはあっという間に深く問題の核心へと導き入れられるというわけである。

このようにして成立する洞察は、クザーヌスのメタ三段論法的な導きによってもたらされるものであり、それゆえに一種の直観とも表現することができるだろう。そして、この直観に到った者は、まさに「おお、何という難しいことの容易さであることか」と、『無学者・知恵について』における弁論家のように言うことになるにちがいない<sup>(54)</sup>。

## 6. 結語——楽しむ無学者としての枢機卿ニコラウス・クザーヌス

クザーヌスにおける理想的人物としての楽しむ無学者 *idiotia ludens* とは誰

<sup>(52)</sup> *ebd.*, II, S. 52f: *Ferdinandus: Sic est, ut dicis, et hoc clare conscipio, qundo Deum esse non aliud quam Deum video et aliquid non aliud quam aliquid et nihil non aliud quam nihil et non-ens non aliud quam non-ens. [...] Per hoc enim video non-aliud talia omnia antecedere, quia ipsa definit, et ipsa alia esse, cum non-aliud antecedit. [...] Nicolaus: Ex his igitur nunc plane vides de li non-aliud significatum non solum ut viam nobis servire ad principium, sed innominabile nomen Dei propinquius figurare, ut in ipso tamquam in praecisiori aenigmate relucescat in quirentibus* (圏点は引用者。松山・塩路訳10頁)。

<sup>(53)</sup> *Vgl. De ap. theor.*, n. 2, 9f: *Petrus: Quid quaeris? Cardinalis: Recte ais. [...]*

<sup>(54)</sup> *De sap.*, II, n. 45, 1: *Orator: O miranda facilitas difficilium!*

であろうか。彼は、貧しく<sup>(55)</sup>、謙遜で<sup>(56)</sup>、敬虔で<sup>(57)</sup>、自立しており<sup>(58)</sup>、無知で職人でもある。同時に彼は、新しい知識に対して開放的でありつつ、自ら多様なデータの収集を提案するようなイノヴェイティヴな人物でもある<sup>(59)</sup>。

以上の特徴から、無学者という人物像が実はこの著作の著者そのものと多くの共通性をもっていることが明らかであろう。確かにクザーヌスは無知であったわけでもなく職人であったわけでもない。しかし彼は、船主の息子として、職人たちの傍らで大きくなったのであり、上に紹介した彼の最後の故郷滞在の際には職人たちとも出会ったことだろう。

自分がローマ教会の中枢部で枢機卿にして司教として働くことになった1449年から50年夏までのいずれかの時点で、ニコラウス・クザーヌスは、この無学者を自分がたえず参照すべき人物像として、いわばカウンターバランス *Gegengewicht* として構想したのではないかと私には思われるのである。この人物像を設定することによって彼は、プラトンの意味での神の手の中に居る玩具 *Spielzeug*<sup>(60)</sup> としてではなく、無学者の意味での神の道具 *Werkzeug* として生涯の最期まで神に仕えることを決意したのである<sup>(61)</sup>——この無学者像をたえず参照することによって、栄華に満ちた教皇庁の中にあっても初心を忘れることのないように心がけながら。このことは、上で紹介した『全面的改革』の内容並びにピウス二世教皇の手記が示しているとおりで<sup>(62)</sup>。

(55) *Ibid.*, I, n. 1; *Ibid.*, II, n. 28, *De mente* I, n. 54.

(56) *De sap.*, I, n. 4; *Ibid.*, II, n.47; *De mente*, XV,n.160.

(57) *De sap.*, I, n. 27; *Ibid.*, II, n.46; *De mente*, XV,nn.159.

(58) *De mente* I, nn. 54.

(59) *De stat. exp.* とくに h V, n. 178, p. 231, 16-18.

(60) プラトン『法律』VII, 10, 803D- 804B (森・池田・加来訳424頁以下)。

(61) クザーヌスは死後すぐに、あらゆる行動において素晴らしい模範を示したもっとも貧しい枢機卿であったと、ヴェスパシアノ・ダ・ビスティッチの『15世紀の著名人伝』において記された。この点については以下を参照されたい：Watanabe: 182; 200；渡邊：120頁。

(62) 教皇庁におけるクザーヌスの日常的な態度がきわめて誠実なものであったことは、彼が仕えたピウス二世教皇が自分の手記においても書き留めているところである：Gabel: 221. この教皇の手記の当該箇所についての日本語訳は、八巻和彦1994の107頁以下、および渡邊守道143頁を参照されたい。

教会における任務の多忙さのなかにあってもなお、クザーヌスは遊び楽しむ時間があつたのだろうか。あつたにちがいない。知恵と真理という喜びの源泉を、楽しみながら探求する時間を持てた時に。すなわち、彼自身の本来の任務のほとんどすべての時に、彼はたしかに遊び楽しむことができていたであろう——彼の哲学的な業績が今もなお示しているように。そして、〈idiota ludens としてのクザーヌス〉という逆説的なあり方には、クザーヌスが生涯にわたって立脚し続けた〈docta ignorantia〉の思惟が見事に映現しているのでもある。

#### 文献リスト

ニコラウス・クザーヌスの著作の原典としては、Nicolai de Cusa Opera Omnia, iussu et auctoritate Academiae Litterarum Heidelbergensis ad codicum fidem edita を用いて、引用の際には当該著作のこれにおける巻およびその中の箇所を h に続けて表示する。また、以下のリストでは、まず注において使用する作品の略号を示し、その後正式な作品のタイトルを表示する。また、日本語訳の存在するものは、その当該箇所を表示する。しかし本稿における訳文は、必ずしもそれらの日本語訳とは一致していない。

Cusanus, Nicolaus: *Apologia. (Apologia doctae ignorantiae)*

.....: *Compendium* (大出哲・野澤武彦訳『神学綱要』[国文社刊 2002年])。)

.....: *De ap. theor. (De apice theoriae)* (佐藤直子訳『テオリアの最高段階について』[上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成』第17巻「中世末期の神秘思想」(平凡社刊 1992年) 所収])

.....: *De coni. (De coniecturis)*

.....: *De doct. ign. (De docta ignorantia)* (岩崎允胤・大出哲訳『知ある無知』[創文社刊 1961年])

.....: *De fil. (De filiatione dei)* (坂本堯訳『神の子であることについて』[大出・坂本訳『隠れたる神』(創文社刊 1972年) 所収])

.....: *De genesi* (酒井紀幸訳『創造についての対話』[上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成』第17巻「中世末期の神秘思想」(平凡社刊 1992年) 所収])

.....: *De ludo (De ludo globi)*

.....: *De mente (Idiota de mente)*。

.....: *De non aliud* (Reinhardt, Machetta und Schwaetzer[Hrsg.]: *Nikolaus von Kue: De non aliud/Nichts anderes*, Münster 2011). (松山康国・塩路憲一訳『非他なるもの』[創文社刊 1992年])

.....: *De sap. (Idiota de sapientia)* (小山宙丸訳『知恵に関する無学者の対話』[上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成』第17巻「中世末期の神秘思想」(平凡社刊 1992年) 所収])

.....: *De stat. exp. (Idiota de staticis experimentis)*

.....: *De poss. (De possess)* (大出哲・八巻和彦訳『可能現実存在』[国文社刊 1987年])

.....: *De ven. sap. (De venatione sapientiae)* (酒井紀幸・岩田圭一訳『知恵の狩猟について』[『キリスト教神秘主義著作集』第10巻「クザーヌス」(教文館刊 2000年)])

.....: *De vis. (De visione dei)* (八巻和彦訳『神を観ることについて』[岩波文庫所収 2001年])

.....: *Epistula ad Nicolaum* (Gerda v. Bredow (hrsg.), C-T, IV, 3, Heidelberg, 1955) (八巻和彦訳「ニ

- コラウスへの書簡」〔八巻和彦訳『神を観ることについて』所収〕。  
 .....: *Reformatio generalis*.  
 .....: *Sermo CXCI*.  
 Gabel, Leona C.: *Secret Memoires of a Renaissance Pope*, London, 1988.  
 Haubst, Rudolf: *Studien zu Nikolaus von Kues und Johannes Wenck*, Münster, 1955.  
 Huizinga, Johan: *Homo Ludens, Vom Ursprung der Kultur im Spiel*, Hamburg 1981 (里見元一郎訳  
 『ホモ・ルーデンス』〔河出書房新社刊 1971年〕)。  
 Institut für Cusanus-Forschung (hrsg.): *NvK Predigten in deutscher Übersetzung*, Münster 2007, Bd.  
 3.  
 Meuthen, Erich: *Nikolaus von Kues 1401-1464 – Skizze einer Biographie*, Münster 1992.  
 モイテン著・酒井修訳: 『ニコラウス・クザーヌス』(法律文化社刊, 1974年)  
 Meuthen, Erich: Hallauer, Hermann (hrsg.): *Acta Cusana*, I, 2, Hamburg 1983.  
 プラトン: 『ファイドン』(岩波版『プラトン全集』1980年, 第1巻, 松永雄三訳)  
 .....: 『リュシス』(岩波版『プラトン全集』1980年, 第7巻, 生島幹三訳)  
 .....: 『ゴルギアス』(岩波版『プラトン全集』1980年, 第9巻, 加来彰俊訳)  
 .....: 『法律』(岩波版『プラトン全集』1981年, 第13巻, 森信一, 池田美恵, 加来彰俊訳)  
 Schlag, Wilhelm: Thomas, Marcel (Kommentar): *Das Jagdbuch des Mittelalters, Ms. Fr. 616 der Bibliothèque nationale in Paris*, Darmstadt 1994.  
 Steiger Renate: Einleitung zu *Idiota de sapientia* in: *Der Laie über die Weisheit*, Hamburg 1988.  
 Watanabe, Morimichi: *Concord and Reform*, Aldershot/ Burlington USA/ Singapore/ Sydney 2001.  
 渡邊守道: 『ニコラウス・クザーヌス』(聖学院大学出版会刊 2000年)  
 八巻和彦: 「クザーヌスにおける〈周縁からのまなざし〉——“De concordantia catholica”から“Idiota  
 篇”へ」(『文化論集』〔早稲田商学同攻会刊〕第5号, 1994年所収)  
 八巻和彦: 「クザーヌスの世界像」(創文社刊 2001年)  
 Zilsel, Edgar: *Die soziale Ursprünge der neuzeitlichen Wissenschaft*, Frankfurt am Main, 1976 (青木  
 靖三訳『科学と社会』〔みすず書房刊 1967年〕)。  
*dtv Lexikon des Mittelalters*, Bd. I, München 2003.